MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

News Letter 中部大学民族資料博物館

vol. 11
October 2016

館長の作品紹介シリーズ

アフリカ木彫資料の公開について

中部大学民族資料博物館館長・国際関係学部教授 和﨑 春日

アフリカ諸国の日本大使館での長い勤務経歴をもち、ユネスコ事務局長を務められた松浦晃一郎氏が、アフリカの仮面・彫像など約100点を中部大学民族資料博物館に寄贈されることになりました。これを記念して、松浦コレクションの公開展示と記念講演を、5月10日に「アフリカへのまなざし－広大な自然と多彩な文化」と題して開催しました。

公開式典には、松浦夫妻を招き、飯吉理事長、岸田副学長、陶芸家の玉置保夫氏をはじめとする学内外の交流を持つ多くの皆様とともに、新たな門出を祝うことができました。

式典であいさつする和﨑館長

アフリカの仮面や木彫は、ご覧の通り、極端な形にデフォルメされ発明された造形であるにもかかわらず、精巧な写実性が併存しています。これがアフリカ工芸文化の奥深さであり、ピカソやミロなどが真似ようとした変形抽象化と具象化の同時発現の力です。ナイジェリア・ムムイェ民族の仮面の極度に長い首もそうです。ナイジェリア・イボ民族の、顔・首・胴体があれば胴体の部分も顔の仮面にしてしまう造形力がそうです。アフリカ社会のイマジネーションは、クリエーションなのです。額が前面に突き出た仮面は、ファン民族に特色的な様式です。

テープカットの様子
松浦夫妻（中央）・飯吉理事長（右）・館長（左）

展示に示されたガボンと赤道ギニアという、ファン仮面の2カ国にまたがる所属は、植民地分割によってファン民族の日常生活が分断されたことを意味しています。同時に、その植民地化の苦難を乗り越えるアフリカ民衆の生活文化の力が、仮面をとおして矛盾を笑いと祈りに変えて前面化します。

文化財という歴史伝統性を担ったものでも、現代との交渉が必ずあります。コートジヴォワール・バウレ民族の仮面は鉱山帽をかぶっている。グロ民族の仮面は、頭に子供と自動車を載せている。

フランスの警察官・軍隊の帽子や勲章を、民族の木彫が身につけている。（次ページにつづく）

索引

◇館長の作品紹介シリーズ
第1回「アフリカ木彫資料の公開について」 1
民族資料博物館館長　和﨑春日

2016春季・夏季行事報告
◇実技講座
4月 「平成28年度　特別講座（古典絵画）」の開催について 2
日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員　下川辰彦
民族資料博物館　原田千夏子

◇公開記念シンポジウム
5月 アフリカ資料 公開記念（松浦コレクション）シンポジウム 3
民族資料博物館副館長　宇治谷　恵

◇夏季企画展示
7月 8月 エジプトの沙漠からオロンテス河畔まで中部大学の教員が関わるエジプト、シリアにおける考古学調査 4
国際関係学部教授　中野智章
人文学部共通教育科准教授　西山伸一

◇夏季企画展示ギャラリートーク
7月 テル・マストゥーマ遺跡の発掘調査を中心にシリアでの考古学調査について 5
人文学部共通教育科准教授　西山伸一

8月 アル・ザヤーン神殿の発掘調査を中心にエジプトでの考古学調査について 5
国際関係学部教授　中野智章
（民族資料博物館　原田千夏子）

◇トピック
コモンズ企画　異文化を通した他学部交流のイベントにおける民族資料の活用について 6
全学共通教育部 全学総合教育科講師 コモンズコンシェルジュ　平井芽阿里

2016 下半期（秋季冬季）行事案内 6

新たに加わったアフリカ木彫資料

ガーナ・アシャンティ民族の４人すくみの鍋置き・カゴ置きも、現代技法と伝統表現の融合でしょう。

文化財とは、静態として固定した形でずっと伝承されるものではなく、むしろ本質的に今と激しく呼吸し合うものです。そうだからこそ、消えることなく次代に生きるのです。

当館は、県内の大学では４校しかない「博物館相当施設」として認可された大学博物館です。このたび加わることとなった松浦コレクションとともに、今後はますます学内外に広く活用され発展していくよう努力を惜しまないことをここに誓うものです。

※ 本稿は、「ANTTENA No.133」(2016.7) に掲載された「民族資料博物館　松浦コレクションのもつ意義―日本におけるアフリカ研究の中心へ」の記事にもとづき一部改訂したものです。

2016春季夏季行事報告

4月

実技講座

「平成28年度　特別講座（古典絵画）」の開催について

‖ 期間 ‖ 2016年４月20日～2017年１月18日（予定）通年
水曜日・午後／全26回　一般有料（定員制）
‖ 教室 ‖ 10号館６階　106Ｊゼミ室

指導講師：下川 辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館 外部専門委員）
担当：原田千夏子（民族資料博物館）

受講者：16名

講師から制作指導を受ける様子

本講座は、開館年度から、日本画の作品制作という実技を通じて伝統文化の素材や技法を体験し理解する生涯学習プログラムの実践の場として開講してまいりました。近年は、日本画の制作を長年継続して行っている経験者を主な対象とさせていただいています。それは、当館が大学博物館ならではの特色として、専門的な大学教育の一端を一般対象に普及する、独自の生涯学習プログラムの実践を目指してきたことに関連します。

そのための取り組みとして、昨年度からは、かつて半期毎に区切っていた講座を通年制にきりかえることで、一人ひとりがじっくりと作品制作に取り組むことができる状況に変更しました。その分、当然受講生は年間を通した自身の制作計画を練り、実際に自発的に進行していき、年度の最終段階では作品を完成の域にあげていくという、これまで以上に個々の制作意欲が形となって問われることになります。自ずと講座全体には、良い意味での緊張感がみなぎっています。

そのような問題意識を受講生から引き出し、展示までの段階にもっていくよう博物館はエールを送り並走する面持ちで、支援していきたいと思っております。

また、当館の学習テーマの軸の一つであります「素材研究」の観点から制作過程について、映像で少しずつ記録しています。本講座における古典絵画という伝統技法の素晴らしさを再認識するため、視覚資料を近い将来に参考教材として提供できるよう、努力していきたいと考えています。　（下川）（原田）

講座風景

5月

公開記念シンポジウム

アフリカ資料公開記念（松浦コレクション）シンポジウム

‖ 期間 ‖ 2016年5月10日（火）
‖ 会場 ‖ 不言実行館1階アクティブホール

テーマ 『アフリカへのまなざし…広大な自然と多彩な文化』

パネリスト：松浦 晃一郎（学校法人中部大学　学事顧問）
青木 澄夫　（国際関係学部教授）
大橋　岳　（人文学部共通教育科講師）
佐藤 尚子　（民族資料博物館）
古澤 礼太　（国際ESDセンター、中部高等学術研究所准教授）
嶋田 義仁　（中部大学客員教授）
和﨑 春日　（民族資料博物館館長、国際関係学部教授）
※掲載は発表順

シンポジウム案内

参加者：248名

平成28年5月10日、午後1時30分より、不言実行館1F　アクティブホールにて、松浦コレクション（西アフリカの仮面・彫像資料）の寄贈・公開を記念したシンポジウムを開催した。シンポジウムのテーマは「アフリカへのまなざし…広大な自然と多彩な文化」であった。

アフリカの広大な地域と自然、多数の民族と多彩な暮らしを中心に中部大学に関わる7名の研究者がアフリカの現状と変遷、都市と村落、生産と生業、文化と文明などの特定の学問分野だけでは対応しがたい多義で複雑な課題にたいし、最新の学術成果や知見を紹介することであった。

講演の前に和﨑民族資料博物館長からシンポジウムの趣旨があり、次に飯吉中部大学理事長からご祝辞をいただいた。

シンポジウムに入り、松浦コレクションの収集者であり、中部大学の学事顧問である松浦晃一郎先生から基調講演をいただいた。松浦先生は、前ユネスコ事務局長として、世界遺産条約づくり、あるいは外交官としての豊富な経験などから、アフリカの政治、経済や生業から見える仮面・彫刻や音楽などの有形・無形の文化遺産について有意義で示唆にとんだお話をいただいた。次に、パネルディスカッションとして中部大学の青木澄夫、大橋岳、佐藤尚子、古澤礼太、嶋田義仁の諸先生からアフリカにおける日本との交流、自然と生態、コーヒー栽培と生業、西アフリカ王国文化、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地域文明など多彩で多様な文化の研究発表がおこなわれ、最後にまとめとして和崎春日館長から宗教、王政、生産、職人などの視点での課題や今後の研究の展開および総括がおこなわれた。諸先生の熱弁は時の経過を忘れるものであり、質疑応答を含めると時間をオーバーしてしまったが、多くの参加者が席をたたない有意義なシンポジウムであった。大学博物館の役割は、資料を展示することだけでなく、資料から新たな学術情報を生み出すこと、多面的な学術情報を広く社会に発信することだと考えます。その意味においても、今回のシンポジウムはこれからの博物館の方向を考えるとともに、新たな展開に発展させるうえでも重要な行事となったと考えます。なお、現在、シンポジウム報告書を取りまとめ中であることを申し添えて、簡単な報告とします。

（宇治谷）

シンポジウムの様子

講演する松浦氏

7月
―
8月

夏季企画展示

「エジプトの沙漠からオロンテス河畔まで 中部大学の教員が関わる エジプト、シリアにおける考古学調査」

‖ 期間 ‖ 2016年7月4日（月）～8月7日（日）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館　シルクロード室、図書館1階エントランス
‖ 主催 ‖ 民族資料博物館
‖ 協力 ‖ 公益財団法人　古代オリエント博物館
‖ 企画 ‖ 中野智章（国際関係学部教授・民族資料博物館運営委員）
西山伸一（人文学部共通教育科准教授・民族資料博物館運営委員）

入館者：871名

展示案内

エジプト地域展示担当
「エジプトの沙漠からオロンテス河畔まで」を終えて

テレビや新聞で目にするシリア難民の様子や内戦の悲惨さに関しては、発生してから5年近い歳月が経過したこともあってか、悲しいことにそれがもはや耳慣れた現実となっている感がある点は否めない。死者は数十万、難民は200万人をはるかに超えるとされる。普段の講義でシリアを含むいわゆる「中東」（ただし、この用語はヨーロッパ側から見た際の地域名称で、現在では「西アジア・北アフリカ」と単に地理上の位置で示すことが多い）とされる地域を取り上げる場合、学生の反応はIS（ISILと呼ばれる、イラクやシリアを中心にテロを行うイスラム過激派組織）のイメージが強烈なためか「怖い」の一言で片付けられがちで、背景に、古代から連なるどのような歴史や文化などの流れが存在したのかを伝える必要性が今まさに高まっていることは、最近とみに感じていたところであった。

今回の企画展では、そうした危惧やパルミラ遺跡などの世界遺産が大きな被害を受けている現状なども踏まえ、シリアをフィールドとする同僚の西山伸一氏と、エジプトをフィールドとする筆者がそれぞれ考古学調査を行った遺跡について紹介し、これら地域が現代の我々の生活にも通じるさまざまな文明の発祥の地であり、我が国とも深い関係を有していること、また、現地の人びとの暮らしぶりなどにもふれながら、この地域の持つさまざまな豊かさを見学者の方々に感じて頂けるよう展示を構成した次第である。

展示にあたっては、東京の古代オリエント博物館に協力を仰ぎ、数は30点ほどとやや少ないものの、東海地区の大学ではおそらく異色の、シリアやエジプトで実際に発見された遺物を公開する機会を得た。また、調査の様子や美しい風景を写したパネルなどを通じ、過去と現在との対比に思いをはせた方々も多かったのではないかと感じている。幸い、学内だけでなく学外からも多くの方々にご来館を頂くことが叶ったが、今後ともこうした活動を継続していくことが重要と考えている。

（中野）

展示風景

1階エントランス展示の様子

シリア地域展示担当
シリア考古学関係の展示について

今回の企画展示のうちシリア考古学関係の展示資料については、古代オリエント博物館（東京・池袋）がシリア・アラブ共和国で実施した発掘調査の出土資料やそれに関連するパネルが中心になっています。出土資料は、私も参加したシリア北西部イドリブ県のテル・マストゥーマ遺跡からのものです。この遺跡は、1980年から1995年にかけて計8回の発掘調査が行われました。ここはいまから約2800年前の「鉄器時代」の村落跡になります。この遺跡の重要性は、なによりも

当時の村落がこれまでにない規模で広範囲に発掘され、当時の一般の人々の生活が復元できることにあります。

マストゥーマ遺跡の位置するイドリブ県は、「緑のイドリブ」ともいわれ、シリア国内有数のオリーヴの生産地です。見渡すばかりのオリーヴの木々が広がる丘陵地帯での発掘調査は、「中東＝沙漠」という固定観念を大転換させる経験を私に与えてくれました。私は、このマストゥーマ遺跡での1994年の調査をかわきりに、内戦直前の2010年までほぼ毎年シリアで考古学調査にかかわることになりました。

2011年に始まったシリア内戦は、本当に残念なことです。過去5年間で25万人以上の死者、400万人以上の難民を出し、過去に類例を見ない勢いで世界に影響を及ぼしています。私の友人や関係者の中にも命を落とした人々がいます。一日も早い内戦の終結を望まずにはいられません。

この5年間でシリアを含む西アジアでの考古学調査の数は、治安の不安から大きく減退したのは事実です。かつてシリアでは6つの日本調査団が活躍し、西アジアにおいて最も盛んに日本人の考古学調査が行われていた場所でした。調査は、単に現地で遺跡を発掘するだけでなく、現地の人々といっしょに働くことで、お互いに文化の違いを認め、より良い人間関係を築き上げるといういわば民間レヴェルの国際交流ともいえます。今回、日本のシリア調査の成果の一旦をご紹介することで、古代西アジアの人々の生活を理解していただくとともに、現在内戦で苦しむシリアの人々の心に思いをはせることを願っています。

（西山）

7月－8月

夏季企画展示ギャラリートーク

「夏季企画展示 ギャラリートーク」の開催について

‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 シルクロード室

参加者：75名（2回合計）

第1回　2016年7月12日（火）

テーマ　『テル・マストゥーマ遺跡の発掘調査を中心に シリアでの考古学調査について』

講師　西山伸一（人文学部共通教育科准教授・民族資料博物館運営委員）

第2回　2016年8月2日（火）

テーマ　『アル・ザヤーン神殿の発掘調査を中心に エジプトでの考古学調査について』

講師　中野智章（国際関係学部教授・民族資料博物館運営委員）

ギャラリートークの第1回目は、展示のシリア地域を企画担当した西山委員が、現地での考古学調査の様子を、写真パネルやシリア遺物をもとに解説しました。現在は内戦が続く地域ですが、人びとが農耕の発祥の地とされるメソポタミア文明を継承する文化を育み、家族制度を通じて力強く生活している姿についてもお話しいただき、参加者はひとときと時空を超えて歴史の空気に触れることができました。

ギャラリートーク第2回目は、展示のエジプト地域を企画担当した中野委員が、現地の考古学調査の様子を、調査活動を記録したポスターや古代オリエント博物館所蔵の一般的なエジプト遺物をもとに解説しました。

調査では、考古学者のほかに、工学系レーザー探査の専門研究者や現地の研究者といった文系理系の研究者が大規模に共同研究グループを組み、日中は50度にも達する熱砂の厳しい自然環境のなかで協力して調査活動をすすめられた様子を詳しくお話いただきました。

いわゆる「アラブの春」以降、現地に赴いて行う研究活動が難しくなった状況にあるとのことですが、いずれ再開される日が訪れ、新たな発見がこれからももたらされ、私たちに多くの歴史の魅力を届けられていくことを願ってやみません。

（記録　博物館 原田）

ギャラリートーク

コモンズ企画
異文化を通した他学部交流のイベントにおける民族資料の活用について

平井 芽阿里（全学総合教育科講師／コモンズコンシェルジュ）

その日、普段は話し声で賑わうスチューデント・コモンズに、多国籍な音色が響き渡っていました。さまざまな国の楽器を不思議そうに眺めながら、触れたり叩いたりと楽しそうに音を確かめる学生たち。

7月23日、不言実行館2階のスチューデント・コモンズのステージエリアで、国際文化学科3年の沼田恵美さんが代表となって企画した「Sunnyside Plaza」が開催されました。

コモンズセンターには、コモンズ企画という、コモンズセンターを拠点とし学部学生の人間力向上を目的に、学生が主体となって実施する企画があります。沼田さんは記念すべき初の応募者で、コモンズサポーターである小坂真生さん、藁科友理さん（いずれも国際文化学科3年）と協力しながら、立案、実行、運営にいたる全てを自ら執り行いました。

「Sunnyside Plaza」は、国際関係学部だけでなく他学部の学生にも、異文化交流を通した誰でもが参加しやすい新しい国際交流の形をコモンズセンターで作ることで、より多くの学生に異文化理解を深めてもらうことを目的に企画されました。企画書を何度も練り、形にまとめ、いざ実行するとなると、当初は計画に入れていた留学生が参加できず、どのように異文化交流を行うのか、という課題にぶつかりました。

何よりの強い味方となってくれたのが、民族資料博物館でした。民族資料博物館に相談に行くと、なんと民族衣装10着に民族楽器5点という、大変貴重な展示物を貸していただけることになったのです。企画を行う前日、不言実行館まで慎重に搬入し、ひとつひとつ丁寧に展示すると、スチューデント・コモンズは見事に彩られました。

当日は、20人を超す学生が集まり、手作りのパネルで紹介された世界遺産をスタンプラリーで巡り、演奏会を行い、マサテコ族の民族衣装にも身を包みました。

異文化交流に欠かせない鮮やかな魅力を添えていただけたおかげで、企画は大成功に終わりました。担当コンシェルジュからも心より御礼を申し上げます。

（平井）

スチューデント・コモンズ

2016 下半期（秋季冬季）行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

◇展示

アフロ・ユーラシア　内陸乾燥地文明展

黒アフリカ・イスラーム文明から考える

（アフロ・ユーラシア　内陸乾燥地文明研究会代表　嶋田義仁 中部大学客員教授による）

会期：平成28年12月5日（月）～平成29年3月8日（水）
場所：中部大学民族資料博物館

◇成果発表展示

「平成28年度　特別講座受講生作品発表展示」

会期：平成29年3月22日（水）～ 4月6日（木）
場所：中部大学民族資料博物館